

三毛の文学的表現方法と思想

小野 愛子 (艾 美娟)

San Mao : the Method and Thought of Her Literary Expression

Aiko Ono (Mei Juan Ai)

The subject of this thesis is to give a close observation on her method and thought of literary expression.

When reading through San Mao's works, the change or a kind of progress is recognized on her way of expression and the character of her thought at the turning point when she returned to Taiwan in year 1981. So, her creative activities should be divided into two periods. The earlier period is considered to be 4 years, from May 1976, the time when "the Stories of Sahara" was published, to February 1979 when "Gentle Nights" was published. There were 5 books written during this period, the most brilliant ones of her all. And that was the time of 6 years when she spent her life with her husband Jose. "I could not have written any of my books if Jose did not offer me the freedom, the confidence and the love." San Mao wrote. To her, the marriage life with Jose was the peak of her life. And she lived radiantly for herself then. The death of Jose changed her philosophy of life and her way of expression as well. In 1981, San Mao returned to Taiwan. And from then on to the time when she died, her creative activities is determined to be the later period. During this period, there were the publications of "Falling Flowers in my Dream" - the memory to her husband, "Walking Over Mountains & Rivers" - the travel notes to Middle South America, "Words from my Heart" - the letters to the readers, "The Storm of the Fleeting World" - the script, and etc. And it was also the time that San Mao wrote for her readers and the world as a mature writer.

Above all, the works of her earlier period and later period expressed two different philosophy of life. The observation was focused on the method of expression and thought while comparing her works of the 2 periods.

はじめに

本稿の課題は、台湾の女性作家作家・三毛(1943年3月26日出生、1991年1月4日死去)の文学的表現方法と思想とについて考察することにある。

私は、文化大革命の後期の時代に北京で少女時代を送った。1976年の秋に文化大革命が終息し、中国は新しい時代を迎えた。そののち中国の社会に起こった変化は本当に劇的であった。マルクス・レーニン主義の政治的束縛から解放された人びとにとって、最初の欲求は、満たされることにな

かった精神的な餓えの解決であった。テレビや映画などのメディアが未発達であった当時の中国社会では、書物が精神的な糧となった。各種各様の図書が出版され、人びとの飢えを満たした。80年代の初頭以降、北京では毎年、中山公園で全国各地の出版社や書店の行なう「書市」「書展」が開かれた。そこでは、多くの新書が売られていた。「書市」では日ごろ買い求められないような本を買うことができた。その頃北京の中学生だった私は、読書中毒の中にいた。巴金・茅盾・謝冰心・老舍・魯迅など中国の作家の文学作品ばかりでなく、

『赤と黒』、『バルムの僧院』、『高慢と偏見』、『風と共に去りぬ』、『戦争と平和』、『アンナ・カレーニナ』、『復活』などの欧米の名作をたくさん読んだ。これらの作品は私の目を世界へと開かせてくれた。

私にとって、これらの図書の中で外国の情景をきめ細かく描写した最初の現代中国の文学作品は、台湾の女性作家、三毛による『サハラ物語』(1985年刊)であった。この作品は、人間のやさしさ、自然の美しさ、自由と平和を描いていた。そして、異国情緒にあふれていた。政治や闘争とは無縁の作品であった。殺伐とした政治的環境の中で育った私たちの世代にとって、三毛の作品は新鮮で魅力にあふれていた。当時の中国大陸の文学少女の間では、三毛の作品収集が流行した。「三毛ブーム」の次には、林海音・瓊瑤・僧輝英などの台湾女性作家の作品が出版され、「瓊瑤ブーム」も出現した。

当時の中国政府は、依然として政府に批判的な宣伝に対してはきわめて敏感であり、台湾との文化交流は経済的交流に比べて遅れていた。しかし、一般的に台湾の女性作家の作品は政治色が薄かったから、大陸ではよく出版されていた。これらの中でも、三毛の作品は、文学少女であった私にとって心の糧であり、人生の指針であった。

しかし、当時の私は一文学愛好者にすぎなかった。本稿においては、三毛の文学と思想とを、冷静に、客観的に考察してみたい。

さて、三毛の表現方法と思想とをめぐって、台湾の研究者は次のように述べている。

台湾政治大学教授の柴松林は、「三毛の文章は、濃厚な愛の心やきめ細かな情感にあふれている。この人間関係の疎遠な現代社会において、彼女の文章を読むと、温かみを感じさせてくれる」と評価する〔張、陳 2000：206〕。台湾大学心理学部教授の黄光国は、「現実の生活にはこんなにも多くの苦悶、束縛があり、とりわけ若い人は現行制度のもとで、このような圧力と挑戦に立ち向かわなければならない以上、みんな精神的に一時的なくつろぎを欲し、戦争がなく、恨みごともない、愛にあふれた世界へ逃がりたいと欲している。これも、三毛の文章に人気がある要因であろう。もし三毛に豊かな愛の心がなかったなら、彼女はこのような作品を生み出せなかったであろうと確信する」と言う〔張、陳 2000：206〕。

三毛の作品を通読すると、1981年の台湾帰国以前と以後とで表現方法にも思想の質にも変化というか、ある種の進展が認められる。そこで、創作活動を2期に分けて考察する。私は、三毛の創作活動における前期を、『サハラ物語』が出版された1976年5月から『優しい夜』が出版された79年2月までの四年間と考える。この期間には、5冊の作品が書かれている。この期間の作品群は、三毛作品の中で、最も輝いていた。それは、ホセと暮らした6年間であったからである。三毛は、「もしホセが私に自由、自信と愛を与えてくれなければ、私は一冊の本もかけなかった」〔三毛 1981c：159〕と書いている。三毛にとって、ホセとの結婚生活は人生のピークであった。この時代の三毛は、自分のために生きて、自分のために輝いていた。ホセの死は、彼女の人生観を変え、表現方法を変えた。81年に三毛は台湾に帰った。この時期からその死までを、私は創作活動の後期と規定したい。この時期には、夫への思い出の記『夢の中で花が落ちる』、中南米の旅行記『千山万水を歩く』、読者との往復書簡集『心の話』、脚本『浮き世の嵐』などがある。この時期の三毛は、読者のために、社会のために作品を書いた。そして、そこにあるのは、成熟した作家としての三毛であった。前期と後期の作品は、異なる二つの人生観を表現していたと思われる。両時期の作品を比較しながら、その表現方法と思想について考察するのは、以上の理由による。

ここで、三毛文学の研究史について述べておく。日本の現代中国文学研究においては三毛はほとんど取り上げられてはいない。すなわち未開拓の研究分野であると言ってよい。わずかに、妹尾加代訳の『サハラ物語』(筑摩書房、1991年)が認められるにすぎない。また中国大陸においても、張瑞徳・陳愛璞著『三毛伝奇』(広東人民出版社、2000年)などの研究書が若干あるにすぎない。読者の広がり反して、その研究はきわめて乏しいと言ってよい。

1. 三毛文学における表現方法の展開

(1) 風景をめぐる表現方法

以下、風景、人物、生命をテーマとして、三毛の作品を前期と後期とに区分して、その表現方法の比較を順次行なってみよう。まず、風景をとり

あげる。

例1.〔前期〕初めてサハラ砂漠を見た時

「空港から出て来て、私の胸は非常にときめいた。私は自分の心の内（内心）からわき上がる感動（激動）を抑えきれなかった。私の半生の郷愁は、いったんこの土地に来ると、感動がこらえきれなくなった（感觸不能自己）」〔三毛 1976：196〕。

〔後期〕エクアドルのインディオ人居住地アンデス山脈にて

「山を見たその驚き（駭）、私の魂（靈魂）は、ユーカリの樹林を飛び（飛過）野原を飛び（飛過）、草原を飛び（飛過）、あの冷たい氷と雪を積んだ山の周りを回って、なかなか戻れなくなった」〔三毛 1982：117〕。

〔前期〕では、作者は“内心・激動・感觸”を自分がはじめて想い描いていたサハラ砂漠に来たことの形容に使っている。

〔後期〕では、作者は“駭”の字によって、アンデス山脈を見た時の心の中の驚きを表し、“靈魂冲了出去”で驚きの程度を表している。そして、三つの“飛過”を使って“靈魂”の居場所を述べている。

〔前期〕と〔後期〕の修辞の比較：

〔前期〕“内心”と〔後期〕“靈魂”

〔前期〕“激動”と〔後期〕“駭”

〔前期〕“感觸”と〔後期〕“冲了出去…飛過…飛過…飛過…”

これら3組の語句を通して比較すると、作者は〔前期〕では、一般の人がある物を見たときに使う普通の修辞法を使用している。しかし、〔後期〕では、作者は自分の自然に対する観察と心の中の変化とを融合して表現している。（以下、前期は〔前〕、後期は〔後〕と略記する。）

例2.〔前〕サハラ砂漠にて

「サハラ砂漠、私の心の中の長年の夢の中の恋人よ。目を上げて、無限の黄砂に大風が寂しく（寂寞）むせび泣いて吹きすさぶ。天はかくも高く、地はととても厚く雄大で静かだ」〔三毛 1976b：196〕。

〔後〕アンデス山脈の草原に立って感じたこと

「台湾に居た頃、かつて座談会が終わり、疲れ果て空しい思いでこっそり泣いたことがある。しかし今こうして1人果てしない広野に立つと、かえってあのような寂しさ（寂寞）はなかった」〔三毛 1982：116〕。

〔前〕でも〔後〕でも同じ“寂寞”が使用されている。〔前〕では、“寂寞”は文学作品でしばしば使われる擬人法によって自然界の事物を表している。すなわち、“寂しい嵐”はサハラ砂漠の美しさを表現している。しかし、〔後〕の大自然中でも同様だが、作者は“寂寞”を自分の心の中の世界を形容するために用いている。つまり、都会生活に適応できなくなった三毛は、大自然の中では寂しくないことに気がつくのである。作者は、風景の描写を通して人物の心境を表現しているといえる。

例3.〔前〕初めてサハラ砂漠を見た時

「空港から出て来て、私の胸は非常にときめいた。私は自分の心の内からわき上がる感動（激動）を抑えきれなかった。私の半生の郷愁は、いったんこの土地に来る（回帰）と、感動がこらえきれなくなった（感觸不能自己）」〔三毛 1976：196〕。

〔後〕アンデス山脈に居た時

「目の前の景色は夢の中で幾千度も出て来たはずで、この見覚えある景色は人をあたかも帰郷（回帰）や郷愁のような心境にさせるのである。ああここだったのだ」〔三毛 1982：125〕。

〔前〕でも〔後〕でも同じ語句“回帰”と“郷愁”が使われている。しかし、この二つの語句は、〔前〕と〔後〕とでは、作者の心理表現がきわめて異なる。

〔前〕の“回帰”と“郷愁”は作者が想い描いていたサハラ砂漠を見た後の、自分の心理上の満足と楽しさを表現している。

〔後〕の“回帰”と“郷愁”とは、8年間の生活の試練を経て、人間の種々の苦痛と楽しさをなめ尽くしたあと、ついに大自然の中で自分の生命の落ち着き先を探しあてた時の心の中の感嘆を表したものである。

(2) 人物をめぐる表現方法

例1.〔前〕サハラ人に対して

「この大砂漠の住民について、私は彼らの歩く姿勢、食事の様子、衣服の色彩とデザイン、ジュエスチャーでの言葉、男女の婚姻、宗教信仰などにかかわらず、言い表すことの出来ない関心といとおしさ（関愛）を感じる。さらに、細かい観察と彼らへの接近は私のとめどもない好奇心を充実させるのであった」〔三毛 1976：20〕。

〔後〕南米のインディオに対して

「私はこれらの純血なインディオを注視して、心の中でこらえきれず仲間であること（認同）に狂喜した。彼らはなんと美しいのだろう」／「私が見た限り、インディオは世界で最も美しい（最美麗）人種であると思う。彼らの装飾はさり気ないデザインではあるが、それがかえって自分たちの風格をかもし出している。そして、あの役者のくまどりのようなモンゴル人に似た顔を見ると、更に、私は無我夢中（痴狂）になった」〔三毛 1982：122〕。

〔前〕と〔後〕とは、サハラ原住民のサハラ人とアンデス山脈のインディオに対する描写である。〔前〕で、作者は“関愛、観察、接近、好奇心”の語句を使い、自分のサハラ人に対する心境を描写する。これらの表現は、普通の旅行者の目で新鮮な物事を探求していることを表している。しかし、この探求は衣、食、住、行動、言葉など日常生活面に限られている。サハラ砂漠とサハラ人は、三毛にとって非常に魅力的なものであったが、当時の三毛はただ普通の家庭主婦、普通の旅行者にすぎなかった。だから、これらの語句は当時の作者の心理が比較的リラックスしていたことを表わしている。また、表現の技法としては決して高くはなかった。〔後〕では、まず“最美麗”という語句を用いインディオを形容している。そして、作者は自分と彼らは仲間であるとの考えを示す。また、このような気持ちを表現するために、作者は“認同”と言う語句を使う。しかもこの“認同”について、作者は“狂喜”という強調表現によって自分の心理状態を形容している。また、インディオとサハラ人にたいする好意の程度に関して、作者は“痴狂”と“関愛”を使い、前者に対するいっそうの好意を示している。私は、〔後〕の描写に、苦悩を幾度となく体験して成熟した女性の心理状態とプロ作家としての文章力とを見る。

例2. 〔前〕 サハラ砂漠で会った一人の口のきけない黒人奴隷（啞奴）

「彼は非常におんぼろ（很破很烂）の着物を着ていて（穿得）、ほとんどぼろ布を身にまとい、ターバンを巻いていない、白髪混じりの髪（満頭花白的頭髮）が風の中でなびいている。彼は私を見ると、すぐにへりくだって（謙卑）腰をかがめ（弯下了腰）、胸の前で両手（双手）をあわせ、まるで私に祈るような彼のふるまいは、サハラ人の無礼さととても大きな対比になった」〔三毛 1977b：

221-222〕。

〔後〕 音楽会のチケットが売れないインディオ音楽家

「私はあの人次第に近づいてくる足どりに釘づけとなった。巨大な圧力が私にのしかかってくる感じ（感覚）がした。あの人はいったい何をしたいのか。まだ話ができる距離ではないのに。あの細かい雨にぬれ（淋着雨）、すでに疲れた（疲倦）茶褐色の顔が、無理やり（強）絞り出すかのように（挤出）何十回も卑賤（卑微）な微笑（笑容）を見せた」〔三毛 1982：156〕。

〔前〕では、作者の視線は、口のきけない奴隷の外見や衣服に当てられている。例えば、“穿得很破很烂、満頭花白的頭、謙卑的弯下了腰”は、外見からの直接的な観察描写である。しかし、〔後〕では、作者は人物に対する描写を、外見から相手の心理的視察へと発展させている。はじめに自分の“感覚”があり、人物描写に入ると、ただ外見や衣服だけではなく、主に“淋着雨、疲倦”など顔の描写が中心となる。〔前〕の“謙卑的弯下了腰”と、〔後〕の“卑微的笑容”のように用語には似たところがあり、心理状態の深さを反映してはいるが、描写の程度、水準には違いが認められる。

例3. 〔前〕 三毛とルンペンとの関係

「私はこのルンペンを凝視（凝注）していた。このルンペンは少し肥って、極度に疲れた顔（臉）をし、特別な知恵などなく、目（眼睛）は丸くて小さく、口（嘴）は更に小さく、顎（下巴）は短くて、ほお（両頬）は風に吹かれて裂けたように焦げた赤味を帯び、うす茶褐色の短い髪（短髮）、毛がぼうぼうに生えた短いひげ（胡子）、非常に短いシャツ（衬衫）の下は、だぶだぶの灰色の長ズボン（长裤）であった。」〔三毛 1979：163〕。

〔後〕 中南米に旅行中出会ったキューバ難民

「ポップコーン売りの落ちぶれた（潦倒）中年は、大きな袋をかつぎ、公園の中で一人一人に売り歩いてきた」〔私は静かに（静静的）彼の話聞いて、彼の涙を拭いている姿を見ていた。そのとめどもなく流れる涙には（流不干的眼淚）どれほどの無念（無奈）とつらさ（辛酸）や郷愁があったのだろうか〕〔三毛 1982：71-72〕。

〔前〕と〔後〕とは、作者の知らない男性に対する描写である。一人はルンペンで、もう一人は難民であるが、似た境遇の人物である。

〔前〕では、作者は私たちにもできそうな手法で、一人の人物の外見を比較的細かく描写している。“脸、眼睛、嘴、下巴、两颊、短髮、胡子、衬衫、长裤”などは、緻密な描写の形容である。ルンペンのイメージは読者の前にはっきり提示されている。ルンペンを見た時、作者は“凝注”と言う言葉を使った。それには、好奇心と不安が入り混じっていた。〔後〕では、作者はキューバ難民の外観には何もふれていない。“潦倒”の一言だけを用いて説明している。この一言はこの中年難民のイメージすべてを表している。具体的なイメージは読者の想像にまかせている。作者は簡単な描写の中で“流不干的眼淚”という表現を用い、この難民の人生の苦悩を表している。このとき、作者は“靜靜的”という語句を使って、自分の心理状態を表している。〔前〕の“凝注”と比べると、作者の心の中には好奇心も懸念もなくなっている。他者に対する思いやりにじみ出ている。

〔前〕における人物の外見描写は、〔後〕では人物の心理描写に昇華したと言ってもよい。

(3) 人生・生命をめぐる表現方法

例1. 〔前〕 サハラ人との接触後の情景

「生命はこのようにへんびで遅れて貧しい所(荒辟落后而貧苦的地方)で、一様にすくすくと成長しているが(欣欣向荣)、生きるためにあがいてはいない。砂漠の住民にとって、彼らのこの地での生老病死はごく自然なことのようにだ。私はあの升っていく煙を見ていて、彼らがゆったり(安祥)と優雅になってくるように感じた」〔三毛 1976：198〕。

〔後〕 アンデス山脈の銀湖にて

「湖水は郷愁を感じさせる。月光の下で静まりかえった水面(月光下的那平靜之水)が銀にも似た光を放ち、私の心の中で銀の湖と呼んでいた。旅はここで終わりにしたい(了断)、現代社会に戻りたくない、(但愿永远不回到世界上)三毛という人間はこれより消えてしまいたい(消失)」「あの牛や羊が群をなしている草原や天高い空を眺めると、自分は本当に死んで(死了)ここにやって来たのだ(才落進这个地方)と思わされる」〔三毛 1982：128-130〕。

〔前〕と〔後〕とでは、生命と死に対する認識の違いが示されている。

〔前〕における“荒辟落后而貧苦的地方”は、

作者が“生命”の“欣欣向荣”を感じていることを形容している“安祥”と“優雅”は、生命力の美しさを形容している。このような用語によって、当時の作者の生命・生活への熱愛を表現している。

〔後〕では、“月光下的那平静之水”という情景のもとで、作者は“了断”“但愿永远不回到世界上”“消失”という考えを起こす。牛や羊が群をなす草原や天高い空は、作者に“死了”“才落進这个地方”という幻覚を生じさせた。

〔前〕と〔後〕との比較を通じて、生命に対する認識変化を見てとることができる。

例2. 〔前〕 老人たちと踊り、彼らの演奏する音楽を聞いたとき

「アイリコはバイオリンを弾いていて、一人の老人が私の前に来て、おじぎをした。私は手すりから飛び降りて、彼とワルツを踊りはじめた。私は今までこんなにも優雅なお年よりと踊ったことはなかった。彼らがこんなに私を引きつけるとは思わなかった。彼らの生命への熱愛や短い人生への過ごし方が豊か(豊富)であることは本当に私を感動させた。あの夜、月が湾を照らし、目の前の光景は思わず私に死の問題を思い浮かべさせた。生命はこのように美しい(美麗)、神様はなぜ私達の一人一人を天に召されるの？私は永遠に生きたい、永遠にこの世界を離れたくない」〔三毛 1977 a：90-91〕。

〔後〕 インディオの音楽家の演奏に耳を傾けていたとき

「簡単な一本の笛は、すべての情感と才気が表れていた。この演奏は一生知音を得られない。彼はその気持ちを知らない私におちまけていた。吹いて、吹いて、あの痛ましく、落ちぶれたインディオ人は全身光り輝いていた(光華)。この時の彼は舞台の上で本当の王様であった。私はこの偉大な魂(靈魂)をじっと見つめた。永遠に彼を見つづけていたいが、それは到底不可能だ。死なない(不死)鳳凰、あなたは何故こういう所に隠れているの。あの魔笛がいつ鳴き止んだのかわからない。このホールはまだこの気分の中で覆われている。拍手がない、拍手が出来ない。雨中のご縁で、相手は一回完璧な生命を出してくれた。私は、何も返せなかった」〔三毛 1982：170〕。

〔前〕と〔後〕とは、完全に異なる世界が描写されている。音楽を聴いた作者のインスピレーションはまったく異なる。〔前〕の老人たちは、定

年後、カナリア島でのんびり暮らしている。彼らの人生の旅は終わりに近づいているが、彼らの生命の活力は強く、生活を非常に熱愛している。この情緒は作者に伝わり、彼女は“感動”し、“生命”の“美麗”を思い、“永遠”に生きたい、と願う。これを強調するために、“永遠”が2回使われている。〔後〕では、理想を実現することのできなかった、落ちぶれたインディオ音楽家との出会いを語る。しかし、三毛はこの音楽家の笛の演奏から、偉大な“靈魂”を読み、そして、“生命”の“光華”を見た。

〔前〕から〔後〕にかけて、作者の“生命”に対する認識は“美麗”から“光華”へと昇華していた。

例3. 〔前〕 三毛とホセがカナリア諸島に旅行し、油絵のような風景を見たときの感動

「この風景を見ると、私は再びあの私をとりこにした油絵を思い返す。私が好きだったのは、あの油絵の芸術的価値ではなく、画の中の落ち着いた（安祥）田園生活へのあこがれで（憧憬）あった。だれでも、夢の中の故郷はあの絵の中の風景であるはずだ」〔三毛 1977：163〕。

〔後〕 三毛がコスタリカで友人の農場に居たとき

「人生への追求は幾たびか世の転変（沧桑）を経たあと、まだ土地に対する熱愛（狂愛）が残っている。私の夢の中での思い慕う農場よ。／誰が永遠な放浪旅人になりたいものか。もしある日、手元に自分の土地を握って、青空の下で穀類作物の苗のゆっくり成長するさまを見て、一年間の収穫を計算する。この土地で足についたような（踏実）心情は私にとって、残った人生（余生）の最高の回答である」〔三毛 1982：68〕。

〔前〕で三毛が連想したのは、風景にそっくりな油絵であった。使用されている用語は“安祥、憧憬、田園生活”である。この三つの語句を使って、作者は自分の心理状態を表現する。それは、作者が願う幸福で落ち着いた生活である。自分の愛する人と一緒に静かで穏やかな田園生活を過ごす願望である。未来に対する希望にあふれている。

〔後〕では、作者は人間の“苛穉”を経て一人になったが、依然として人生への追求をもっている。そして田園生活の夢をまだ抱いている。

2. 三毛文学における思想の展開

1 前期作品にあらわれた思想

三毛作品の主題思想は人間性の輝きを表現し、人間性を賛美することである。前期の作品では、生活描写と風景描写とが中心になっている。作者は、まわりの日常生活、風景を描写しながら人間性を表現していた。前期の作品は文学性を目指していた、と言ってもよい。

三毛はかつて、シンガポールの『南洋商報』記者に対して「小市民の辛酸や血涙を描いた大都市の小さな物語こそが、生き生きとして真に迫っていて、自分の書いた物語とは比べものにならないくらいに優れている」と語った〔張、陳 2000：283〕。三毛は、自分の作品にコンプレックスを感じていたのではないか。彼女は、人間性の輝きを表現することこそ、文学作品の真の意義であり価値がある、と意識していた。作家が人間性の輝きを表現するためには、まず自分を高め、自分自身の人間性を輝かせなければならない、と思っていた。しかし、自分には力が足りない、と三毛は感じていた。彼女は、「もしいつか本当に自分の人間性を輝かせることができたならば、書きあがったものは本当にすばらしいものになるだろう」と言っていた。

しかし、私は、これは三毛の謙遜であった、と思う。人として、女性として、作家として、三毛には欠点や弱点もあった。彼女は、時には偏狭であり、時には闊達であり、時には脆弱であり、時には強靱であり、時には過激であり、時には冷静であり、時には宿命論者であり、時に運命に立ち向かった。こうした矛盾の中で、彼女は光り輝いたのであった。

『むせび鳴くラクダ』という著書のなかに、「シャバ軍曹」の物語がある。

三毛が車を運転していたとき、酒に酔って街頭で寝ていたスペイン兵を見て、三毛はそのスペイン兵を車に乗せて兵舎まで送って行ったことがあった。そのスペイン兵はシャバ軍曹と言った。それ以来二人は顔見知りとなった。三毛はある日、軍の売店に牛乳を買いに行った。牛乳があまりに重くて持てず、途方に暮れていた。ちょうどその時、シャバ軍曹が通りかかり、シャバ軍曹の車で送ってくれた。家の近くのサハラ人の小さな店まで来たとき、三毛はその店に用事があったので、

店の傍らに牛乳を置かせてもらった。それを見たシャバ軍曹は、とても腹を立てた。三毛はシャバ軍曹がなぜ腹を立てているのか理解できなかった。後日、ある人が話してくれた理由は、次のようなことであった。16年前のある夜、スペインの砂漠軍団の兵営にいた全員が、睡眠中にサハラ人に刀で殺された。ただシャバ軍曹1名だけが生き残った。彼は酒が大好きで、その夜、彼は酒に酔い兵営の外に飛び出していた。彼は酒に救われたのだ。人種間の矛盾はもともとあったが、これにより憎悪の感情はますます増大した。シャバ軍曹はサハラ人をさらに敵視した。彼の戦友はみな彼らに殺され、その中には彼の実の兄弟もいたからだ。16年間憎しみはずっとシャバ軍曹の胸の中にあり、彼はすべてのサハラ人を憎んでいた。間もなく、西サハラは混乱に陥り、モロッコとモーリタニアが西サハラを分割した。サハラ人は独立を望み、スペインは守備するか撤退するか躊躇していた。人種・民族の矛盾は日増しに高まり、騒乱は一触即発の状況であった。暗殺、毒ガス、爆発、放火など凶悪な事件が次々と起き、地雷や時限爆弾は防ぎようが無かった。ある日の朝、シャバ軍曹は車を運転して出かけた。サハラの子供たちがちょうど箱で遊んでいるのを見た。箱の上には遊撃隊の小さな布の旗が挿してあった。軍曹はあの箱にはきっと何かあり、子供たちを注意しようと、車を降りて、箱の方に向かった。ちょうどそのとき、一人の子供が箱の上に立ててあった旗を抜いてしまった。箱は突然爆発した。この間一髪の時、シャバ軍曹はすばやく箱に掩いかぶさった。彼の身体はばらばらになった。子供たちは、二人負傷しただけであった〔三毛 1977b：34-53〕。

16年間恨みを持ちつづけた対象の一部に対して、シャバ軍曹は自分の生命を投げうって助けたのである。これはどうしたことなのか。シャバ軍曹の最初のイメージは、偏狭な民族主義者であった。しかし、物語の最後の段階で、彼のイメージは劇的に変わる。最後には、良識や愛する心を持った人となる。社会の共有財産である子供を守るために自分の生命を犠牲にする。恨みを愛に変えたのである。愛があって恨みがある。恨みと愛とは互いに補い合い、愛のいっそうの高貴さを導く。これが、三毛の伝えたいメッセージではないだろうか。

平凡な生活の中から人間の輝きを掘り起こすと

ということも、三毛が目指した課題であった。これを、『稻草人手記』のなかの「巨人」という物語に見てみたい。

わずか12才の少年ダニエーアは、三毛の隣人であった。ダニエーアの家庭はとても不幸であった。彼の父親は両足が不自由だった。車椅子に乗らなければ、ベッドに横たわり、生活は自分ではできなかった。彼の母親は更に悲惨であった。末期の肝臓ガンで、全身がむくみ、瀕死の病状であった。家庭のすべてがダニエーア1人にかかっていた。

「ダニエーアは朝6時に起き、ニワトリに餌をやり、ニワトリ小屋を掃除し、卵を拾い、洗濯ものを洗濯機の中につけ、猫や犬に餌をやり、父母の朝食の支度をし、自分の昼食用のサンドウィッチを作り、部屋を掃除してからやっと通学バスに乗って登校する。午後5時に帰宅し、カバンを置いて、私たちと一緒にマーケットに行き、食料を買う。再び家に帰り、すぐにかわいた衣服を取り入れ、母親の午後のお茶を用意し、衣服にアイロンをあて、昼父母が使ったお皿を洗い、夕飯を作り、酒に酔った父親をベッドに寝かし、重病の母親の身体を拭き、また、翌日の父母の昼食用意をし、こうしてやっと犬を散歩に連れて行ってからベッドに入れるのである。すでに、12時を過ぎていた。彼の時間はあまりにも過密で他に何も出来ず、更に睡眠は足りなかった。子供の娯楽は彼とは全く縁がなかった」〔三毛 1977a：225〕。

このような毎日がつづいても、ダニエーアには恨みごともなく、悲哀も失望もなかった。生活には自信があふれており、毎日、父母の世話を努めていた。母がケーキを食べたいと言えば、毎日作った。母がニワトリや猫、犬が好きだと言えば、一群のニワトリ、13匹の猫、1匹の犬を飼った。母が花を見たいと言えば、彼は心をこめて庭を手入れした。母の誕生日には、わざわざ香水を買って、誕生ケーキを作った。そして、母が死んだ。悲しみの中のダニエーアは父のことを気づかい、酒に酔った父を急いで起さず、父の苦しみを減らすため、まず薬を買い、医者を呼び、目覚めたあとの父に何ごとも起きないように手配した。母親を葬送してから、ダニエーアは、「いまは父の面倒を見なければならぬ」と語ったのである〔三毛 1977a：229〕。

ダニエーアは、将来大きくなっても、故郷のスイスに帰らず、カナリア島で獣医になろうと思って

いた。その理由は、母が生前動物が大好きであり、近くに獣医がいなかったためであり、同地の気候が障害者の父によかったからである。

この物語にはもう一つの秘密があった。この夫婦はダニエアの実の父母ではなかった。彼は8歳の時にこの夫婦によって孤児院から連れて来られたのだ。しかし、ダニエアの行為は恩に報いるための行為というわけではなかった。ダニエアは、「自分の父母であってもなくても、どちらでも同じだ」と語っていた。このなにげない言葉の中には、優しい人間性と豊かな愛の心が示唆されていた。少年の行為に、私たちは単なる親孝行というよりも人間性の輝きの発露を見るのである。ダニエアの前では、大人は自分を恥じ、偉ぶっていた大人は自分をちっぽけな存在に感じる。三毛は、この物語の最後で次のように記している。「私はこの赤い髪の巨人を見ると、自分が突然ちっぽけで、まるで一粒のカラシナのように思えた」〔三毛 1977 a : 230〕。

三毛はこの物語の表題を「巨人」と命名したが、本当に的を得た名であった、と思う。私たちは、三毛の“巨人”への限りない敬愛と人間性の賛美をくみ取ることができる。このような物語は、三毛の他の作品にもある。しかし、三毛も人間の弱さを暴露し批判していた。例えば、『サハラ物語』の中の「愛のゆくえ」、『やさしい夜』の中の「五月の花」、「永遠のマリア」等の物語である。しかし、私たちは、これらの物語をととても自然に受け入れることができ、また、人間性や愛に対するいっそう深い認識にふれることができる。そして、感動を与えられる。

ここまで書いてきて、私は、自分が学生時代に受けたプロパガンダ教育を思い起す。私の小学生時代は中国の文化大革命後期であった。その時代は、生活のわずかな空間にも政治的宣伝、政治的教育が満ちあふれていた。その中には、人間性についての教育も含まれていた。しかし、その当時の教育方法は、全国人民が一人の手本を学ぶことであった。例えば、毛沢東の「全国人民は雷鋒同志に学ぼう」(1963年3月5日付『人民日報』)という指示があった。これをきっかけに中国全土で「雷鋒同志に学ぼう」という政治的キャンペーンが定期的に行なわれた。私は、そのキャンペーンの過程で、「シャバ軍曹」と似た物語を読んだのを鮮明に覚えている。劉英俊という一人の解放軍戦士

が、ある日、数人の子供たちが道のまん中で遊んでいるのを見た。突然、何かにびっくりして暴走した馬車が突進して来た。劉英俊はこの数人の子供たちを救うために、自分の身を投げ出した。子供たちは無事だったが、劉英俊は死んだ。わずか22才であった。

これは感動的な物語であった。しかし、この物語は政治に利用された。劉英俊は模範人物となり、中国の民衆は彼に学ぶことを強制された。そして、この政治手段は「学ばされる」側の人間の個性を無視していた。その結果として、民衆は学ぶことの意味を奪われた。さらに、この政治学習で提起された物語からは真実性がはぎ取られたのである。

プロパガンダ教育を強制された経験のある私には、三毛の作品から、彼女が伝えたかった人間の善良さや、人と人との愛、人間性の最も原始的なものを、ストレートに、正直に、自然に受けとめることができるのである。

2 後期作品にあらわれた思想

三毛の後期の作品は、心性描写が中心である、と言ってよい。三毛はホセの死去後、台湾に戻り、大学教員となり、著述活動を本格化した。後期の作品群には、中南米旅行記『万水千山走遍』の他に、『談心』(読者との書簡集)、『随想』(人生に対する感想)、『我的創作生活』(講演会草稿)など、哲学的な著作が少なくない。

三毛は、台中の明道高校の定期刊行物『明道文芸』に「三毛の手紙箱」と題する読者との往復書簡コーナーを設けた。このコーナーに寄せられた手紙を集めて、『談心』を出版した。『談心』の中で、三毛は自分の生活経験と人生に対する認識を披露し、読者の悩みに対処した。事例をあげて、三毛の認識あるいは思想の一端を吟味したい。

事例1. 「最も重要なのは人に愛されることでしょうか」〔三毛 1985 a : 56〕。

〔読者〕人間はこの世の中に生きる上で、最も重要なことは人に愛されることです。生活の中に愛がなければ、どうして人生を認識することが出来るのでしょうか。

〔三毛〕人間は世の中を生きていく上で、最も重要な事は人を愛する能力があるかということ、愛されるということではないわ。私達は人を愛することがわからずに、どうして人に愛される事が出来るの。自らをあわれんだり、文句を言わな

くてもいい。あなたの手紙の中で自分を「不幸」と言っているけれど、不幸は生命の重大な苦悩の局面の時に使う言葉よ。あなたは親友がいないのは不幸だと思っているけれど、万一別の悩みが出て来たら、あなたはどのような言葉を使うの。あなたは人を愛する楽しさを知らないの、人生も良く分からないのでしょうね。頑張ってください。

事例2。「私は楽しみを伝染病にするのが好き」〔三毛 1985 a : 98-101〕。

〔読者〕その時私は悲しかった。私の周りの人は、私の友人でさえ、心の中にいつも感謝の気持ちを持った人はなく、ただ自分が満足すればよいだけの人達で、私は結局彼らを変えることは出来なかった。これはわたしがとても恥ずかしく思ったことです。

〔三毛〕あなたの話は少しも間違っていないわ。この世界には、不満足な人はとても多く、利己的で、自暴自棄の人も多い。時には、私は少しもこの人達に同情もしないし、助けたいとも思わない。言ってあげる価値がない人達なので、永久に目覚めない人は自然に生まれ自然に死ぬのが似合っているわ。もし彼らが不平を言うなら、私達は耳をふさぎましょう。なぜなら彼らは人生や生命に対して、ごくわずかな感激の心も持ち合わせていないから。しかし、他の、本当に同情に値する人達もいるわ。彼らはおそらく気持ちが弱く、悲観的で、理解不足で、貧しく、病気…かもしれない。しかも、利己的ではなく、不満のない人達よ。私がたまに人生に失望した時、自分をあまり押し出しすぎた時など、気落ちすることもあるし、少し天の神様にも不満を言う時もある。けれど、自分がすでに一切持ち合わせていることを思うと、すぐに自分の心を正し、二度と不満を言わず、楽しく毎日を暮らしていく。それだけではなく、私も毎日私が接する社会や人々に楽しみという伝染病を感染させることが好きなのよ。あなたは1つの秘密を知っている。最も深く、最も平和的な楽しみは静かに世界と人の世を見て、ゆっくりその美しさと調和を味わうことなのよ。この楽しみはちょっと見たところありきたりかもしれないけど、実際には奥深く悠長で、私にとっては、生命の楽しみはその中にあるの。

さらに、『随想』においては、三毛は人生に対するさまざまな見方を提起する。

「歲月」：出生は、最も明確な旅行である。死

亡は、まさか別の形の旅の出発ではあるまいか〔三毛 1985 c : 18〕。

「樂命」(樂觀的な人生)：運命に背くことは不可能で、運命に従うのは軽すぎる。運命を守るには真剣でなければならない。ただ樂命がありさえすれば、最も自由自在である〔三毛 1985 c : 37〕。

「愛情」：愛情は、実際の生活において、衣類、食事、金銭、睡眠などの確かなものがなければ、長続きさせるのは難しい〔三毛 1985 c : 63〕。

「生命」：生命は太陽、空気、水があって、はじめて心配なく生存することができる。これは最も基本的な要素である。生きたいという欲求は、とても単純である。しかし、人類は欲張って飽くことを知らない動物であり、飢餓を解決した後は進歩を要望する。進歩した後は、更なる進歩を要望する。物質的な享受をしたのちには、精神的な向上を求める。私たちは、幸福、楽しみ、調和、財産、健康を追い求め、甚だしきは永遠の生命を追い求める。最初的人类は、地球上で野原をうろつく他の動物のように大自然の環境の中で、苛酷な争いをして、ただ生きることのみを求めた。それから自然界の発展により、彼らは村落を作り、家庭をつくった。長い年月の後、国と国との間の区別がはっきりし、民と民の間はお互い人類にすぎないということを、忘れてしまった。隣と自分との間には、高い壁を作った。私たちは他人に見られない壁の内側に住んでいると、やっと安全だと感じるのである。人はまた、寂しさに耐えられず、群集と離れて独居することはできない。それで、私たちは社会を必要とし、人や世間が自分の生命を確立することを求めている。私たちは抑制を忘れ、慎みが分からず、感情を溢れさせて、複雑な日常生活を送っている。結局、「成功」は「保有」の代名詞にすぎない。私たちはひどく変わった。負担がとても重たくなって放り出せないからである。私たちは人から生まれ、人込みの中に居るのが好きだ。生きている時は個体であり、死んだ時も個体だ。しかし、私たちは自分の価値を探求しようとせず、他人が自分の生命にかかわることをあまりに重視しすぎる。孤独はもはや美しくなくなり、私たちは他人を失うことを非常に不安に思っている。実際には、これは自然なことであるのに〔三毛 1985 b : 112-113〕。

おわりに

最後に、本稿の提出した論点をまとめて、結びとしたい。

まず、〔前期〕と〔後期〕における表現方法の違いについてまとめる。

第1に、〔前期〕と〔後期〕の表現方法の比較をすると、前期はアマチュア的であり、後期はプロフェッショナル的であったと言えよう。前期の三毛は専業主婦として作品を書いていた。創作環境には圧力がなく、満たされた生活中的趣味の延長であった。当時の三毛は、「創作は私の生活の中で一番重要なものではなく、これはケーキの上のさくらんぼのようなものだ」と語っていた〔三毛 1981c : 151〕。そのため、前期の三毛は表現方法において未洗練のところはあるが、生き生きとして、明るい三毛が読み取れる。後期の三毛は、作家としての社会的な責任が三毛に重くのしかかっていた。とりわけ、中南米の文学旅行では、聯合報の特別賛助があり、作品の執筆は強制であった。前期と比較すると後期の表現方法はプロの作家のものであり、心理的描写に磨きがかかっていた。後期の三毛はかなり有名人になり、独立的な強い女性である。この独立した女性の苦悩と寂しさは後期の作品の中で読み取れる。

第2に、〔前期〕と〔後期〕とでは、心理状態の変化もあった。前期の作品の中では、生活を熱愛し、人間に対する認識も比較的単純であった。楽しく幸せな三毛があった。しかし、後期の三毛を覆い包んだのは寂しさであった。

第3に、〔前期〕と〔後期〕とでは、人間性に対する認識の深さが異なっていた。後期では、人間に対する愛は深くなり、より精神的なものへと昇華していた。

次に、三毛の思想の変化についてまとめておく。

第1に、表現方法の変化と密接に関係するのだが、三毛自身の人生、愛、に対する認識が変わった。

第2に、たとえば「生命」の中の叙述が示すように、人間性に対する理解が深められた。後期においては、輝きと汚れとの統一体として人間を捉えようとしていた。

第3に、後期においてはキリスト教への傾斜が見られる。たとえば、『談心』の事例2の回答において、三毛は「心の中に感謝の気持ちを持つ」(心

存感謝) という表現を使っていた。これはキリスト教の言葉である。三毛も、両親、夫も皆キリスト教を信じていた。宗教的な叙述は前期の作品中では明瞭ではなかったが、後期の作品にはしばしば表れた。精神的な寂しさが三毛を宗教に近づけたと言ってよいだろう。

参考文献

- 三毛 1976 『撒哈拉的故事』 皇冠文化出版有限公司
 —— 1977 a 『稻草人的故事』 皇冠文化出版有限公司
 —— 1977 b 『哭泣的駱駝』 皇冠文化出版有限公司
 —— 1979 『溫柔的夜』 皇冠文化出版有限公司
 —— 1981 a 『背影』 皇冠文化出版有限公司
 —— 1981 b 『送你一匹馬』 皇冠文化出版有限公司
 —— 1981 c 『夢里里花落知多少』 皇冠文化出版有限公司
 —— 1982 『万水千山走遍』 皇冠文化出版有限公司
 —— 1985 a 『談心』 皇冠文化出版有限公司
 —— 1985 b 『傾城』 皇冠文化出版有限公司
 —— 1985 c 『隨想』 皇冠文化出版有限公司
 —— 1988 『闍學記』 皇冠文化出版有限公司
 —— 1991 『サハラ物語』 妹尾加代訳 筑摩書房
 —— 1993 『高原百合花』 皇冠文化出版有限公司
 張瑞德、陳愛璞 2000 『三毛傳奇』 廣東人民出版社

コメント

この論文は、台湾大学の教授たちの三毛の文章が「濃厚な愛の心やきめ細やかな情感」にあふれたもので、「精神的なくつろぎ」を与えるものだという評価を肯定しながら、三毛の生涯とその文学と思想を独自に分析し論じたものである。

論者は、三毛の文学と思想が前期と後期の二つに分けられるとする。そして論者はその分岐が三毛の夫ホセの死にあると見、三毛の文学と思想が、その前期と後期では表現方法においても、思想——その人生観においても、変化が見られるという。

前期の作品では、“私小説”的に個人的な視点から自己をとりまく環境と個人の生活が描かれており、それは第一節の三毛の前半の生涯を論じた中で明らかにされている。ここで論者は三毛の感受性の強い個性と夫ホセとの愛情の世界を三毛の作品に沿って克明に跡づけている。第二節は後期の三毛の分析にあてられ、夫ホセの死後サハラから台湾に戻った後の三毛の文学的・社会的な活動が描かれていて、三毛のそれが職業的作家の活動として展開されていたことを明らかにし、その活動と作品は、読者のため社会のために書かれ、行われたという。それらは教師としての生徒への対応、中南米への取材旅行、各種の講演などを通して実証されているとする。論者はまた、後期の活動において三毛は職業的な作家としての立場を確立したことによって、対象に対しても前期には見られなかったような深い洞察をするようになり、表現もより深いものになっていると、言語の表現方法の変化の考察を通じて論証している。

第三節はその論証に当てられ、論者は三毛の前期と後期の文学表現上の違いを、三毛自身の文章に即して明らかにし、そこに素人と職業作家としての対象に対する観方の違い、表現方法の違いを見だし、分析している。そして論者はそれを通して、後期においてはより深い思索的な営みがあ

ったと論証しているのである。この点が、論者の三毛論の文学的に最も優れた論及の部分であると言えることができる。

第四節においては、三毛の主要な思想が「人間性の輝き」「人間性の賛美」にあるとして、その例証として「シャバ軍曹」と「巨人」という二つの作品がとり上げられ、この二つの作品にみられる「無私の自己犠牲による他者への奉仕」に人間性の輝きと人間性の尊さを観て、ここに三毛の「人間性の賛美」があると論じている。さらに論者は後期の作品群のなかの『談心』『随想』などにみられる三毛の読者との生活相談・読者との往復書簡を通して、三毛の思索的な営みを明らかにしている。

以上のような三毛の生涯の文学的社会的な活動をとおして、三毛には前期と後期において際立った変化があり、後期には彼女の心理状態から人間性への認識の深さ、人生と愛に対する認識の深さなど思想的に大きく変化したことが結論づけられているのである。これらの論点は論者が新たに提起した分析視角であり、結論であるといえる。

最後に若干の問題点を指摘しておこう。その一つは、三毛と夫ホセとの愛情を愛情論として理論的に追求する視点が不十分であり、その愛情の捉え方が感性的に過ぎ、平板であり一般的に過ぎることである。もう一つは、三毛の作家としての営みと思想が前期と後期では異なり、後期ではより深いものになったと分析している点は傾聴に値するが、その変化の契機と要因——夫ホセの死——が三毛の心理や精神の上にもどのような作用を及ぼしたのかなどの点についてももう少し立ち入った分析が欲しいということである。作家論としては三毛の内面にもう一步切り込んだ分析に欠けていると言える。

(平野 正)